

ことばの学び

a new way of learning Japanese

平成 23 年度版

『小学生の国語』『小学生の書写』

教科書特集号 別冊 Vol.2

特集

漢字の総合的な学習アイデア

『小学生の国語』では、新しい教科書観のもとで、「読めて、意味がわかる」「漢字力から」「書いて、使える」「漢字力へとつなげていける教科書を目指して、漢字学習の新たな提案をしています。

本誌では、子どもたちが漢字の学習に興味をもつためのアイデア、子どもたちが楽しく漢字を身につけるためのアイデアなど、漢字の学習指導に関する具体的なアイデアを集めました。

特に、漢字の学習を単に文字の習得だけに終わらせずに、さまざまな学習と結びつけていく「漢字の総合的な学習指導」として、学びのネットワークづくりの方法をご提案します。

漢字学習から広がる言葉の学びを考えるためのご参考にしていただけると幸いです。

■目次■

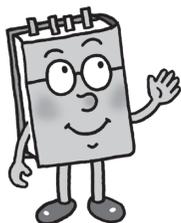


学びのネットワークをつくる漢字学習……………2

一年間を見通した漢字指導……………6

つなげて身につける漢字学習……………8

「漢字の総合的な学習指導」の試み
↳ 『わたしたちの漢和辞典』を作ろう……………10



学びのネットワークをつくる漢字学習

中洩正堯 ●『小学生の国語』監修代表 兵庫教育大学名誉教授

一 漢字学習指導のいくつかの方法

これまでに行われてきた漢字学習指導の方法を整理してみると、次の三つになる。

- 1 教科書はほとんど用いず、自前のプリントを作ったり、市販の漢字学習資料を用いたりして、系統的に学習指導をする。
- 2 教科書に提出された順に、読み教材では文脈に即した学習指導を行う。漢字のコラム等の取り立て教材は課題として扱い、定期的なテスト等によって進める。
- 3 教科書に準拠した漢字ドリル等を使い、学習日程と学習する字数を調整しながら、おおむね課題として扱い、定期的にテスト等によって進める。

この三つの方法では、3が最も多く行われていると思われる。

本稿は、新「学習指導要領」の言語活動の充実という方針を受けて、漢字学習指導の第4の方法、すなわち学びのネットワークづくり

を提案しようとするものである。そのために、まず、「漢字学習指導の基本」を見定めておきたい。

二 漢字学習指導の基本

- 1 書写の学習指導との連携
○文字の書き方 ○筆順 ○画数
- 2 かたかなの学習指導との連携
○漢字の要素面 ○部首への応用面
- 3 漢字の学習指導
○漢字の六書の活用
○漢字の形・音・義
ア「形」…書ける→1との関係
イ「音」…読める→音と訓
ウ「義」…使える→4との関係
*形・音・義それぞれの類同と対比
*形・音・義を部首で学ぶ(原則)
○語句・語彙の学習指導との連携
○漢字の語句の用例 ○類義語と対義語
○仲間の言葉 ○各教科の専門用語

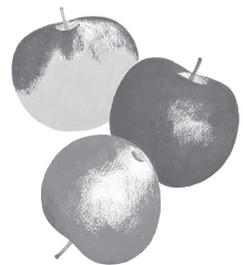
- 慣用句・ことわざ・故事成語
○季語、短歌・俳句、川柳・狂歌、唱歌
*辞典類のフル活用

- 5 興味・関心・意欲の持続と態度形成
○自分なりの法則の発見 ○類比推論

○小学校六年間の見通しと振り返り
本稿では、以上の1〜5を「漢字学習指導の基本」とし、これを授業実践に移すことを、漢字学習指導の第4の方法である「漢字の総合的な学習指導」とする。

三 漢字の総合的な学習指導

「総合的」であることのねらいは、学びのネットワークづくりである。漢字一字の学びから広がる網の目を確かなものにしていくことである、と言い換えてもよい。ここでは、第三学年の配当漢字「開」を素材として、授業のための下準備を例示してみよう。



形・音・義を部首で学ぶことを原則とする考えなので、「開」を「門」と「鳥居の形」に分解する。「鳥居の形」というのは便宜上のことである(成り立ちからすれば、鳥居ではない)。通常の表記や説明の難しいものは、類似の文字による代用や「鳥居の形」などの言い方にする。イメージでとらえることに意義を認めるからである。

次に、形・音・義それぞれの類同と対比を考えることから、「閉」は六年生の配当漢字であるが、「学びのネットワーク」としてはこだわらずに取り扱う。ただし、習得は義務づけられない。「閉」も「門」と「才」の部分(これも成り立ちは「才」ではない)に分解するが、「門」も「才」も、第二学年の配当漢字で書き方は既習である。

漢字の分解に関しては、「漢字の組み立て」(へん・つくり・かんむり・あし・たれ・によ・かまえ)の学びを先行、もしくは並行させる必要がある。

部首の「もんがまえ」は、「門」「間」「閤」(二年)、「開」(三年)、「閔」(四年)、「閉」「閤」(六年)の六字が学年別配当漢字である。形の類同でいえば、部首の耳に属する「聞」(二年)、口に属する「問」(三年)があり、部首の意義を確かめることができる。

この学年では少なくとも「門」「間」「聞」の

学びを振り返り、「開」と「問」はどちらが先行するかによって、一方を振り返ることになる。

「学びのネットワーク」の学び合いは、語句・語彙の学習指導との連携において力を発揮する。

「開」「開く」「開ける」の対比として「閉」「閉じる」「閉める」を意識し、語句・語彙の学びの足がかりとする。

○「目を開ける」「目を閉じる」「口を開ける」「口を開く」「口を閉じる」「口を閉ざす」「重い口を開く」

○「開口一番」「閉口」
○「開いた口がふさがらない」
○「教科書(本)を開く」

○「花が開く」「花が閉じる」「花がしほむ」「花が散る」「花が落ちる」

○「山開き」「川開き」「海開き」「閉山」
○季語「北窓開く」「山開」「炉開」「鏡開」
○「開門」「閉門」

○「開店(店開き)」「開園」「開館」「開校」
「開港」「開国」
○「鎖国」「開化」
○「開始」「開幕」「展開」「閉幕」

さらに、漢字学習の奥行きを求めて、「開」の一字を、昔話や物語の話題につなぐ。

○「開け ゴマ」

○「開けてくやしき玉手箱」(ことわざでもあり、唱歌の「浦島太郎」にも出てくる)

以上のようなことがらを、指導者がヒントを出しながら(他教科等の専門用語にも目配りしながら)、学習者に、これまで見聞きしたことや既習経験にもとづいて、話し合わせる。できるかぎり学習者どうしの目線をとらえたものを引き出すほうが実感的だからである。このことと、辞典等を使った自主的な学びの時間をしっかり組み合わせていく。

辞典については、国語辞典と漢字辞典の引き方、調べ方の学びを先行、並行させる必要がある。

このようにして、漢字一字から学びの網の目を広げていく。もちろん右に準備したことをすべて取り扱うというのではない。また、配当漢字のすべてについて同様の扱いをするというでもない。単純なドリル学習ですますものと、「開」のように広がり可能性の高いものを選別して授業を行うのである。その選別にこそ、指導者の教材・学習材開発の独自性が発揮される。

漢字を通して学びの網の目を広げるのは、国語科にとどまらず、学校教育全体を結び合

わせていくことになる。学校教育を大きな川にたとえれば、漢字の総合的な学習指導は遊水池で力を蓄えることである。遊水池で、言葉の自在で豊かな学びを保障し、力を得て再び流れに棹さしていくのである。

四 新教科書『小学生の国語』の役割

『小学生の国語』は、漢字教材について、「学習の見通しが立つよう、一度に学ぶ新出漢字の数を一定にし、そのうえで文脈の中の意味もとらえられるようにする」という編集方針を立てている。これは、本稿冒頭の「一

漢字学習指導のいくつかの方法」で述べた第2と第3の方法を両立させる企画である。

学年別漢字配当表に示された漢字(新出漢字)については、全学年すべて「取り立て関連教材」として配置しているが、低学年と中・高学年とで、教材化の方法が違う。

低学年では、日常生活における基本概念や基本的な価値を示す漢字が比較的多く配当されているため、これらをいくつかの仲間に関連し、グループ化した取り立て関連教材(日常生活との)としている。

中・高学年では、「新しい漢字を学ぼう」を各学年十か所設定している。一つの「新しい漢字を学ぼう」(取り立ての学び)に配当されている新出漢字は、次の「新しい漢字を学ば

う」の前までの数教材(教材関連)の中で、実際に語句の形で提出される(文脈上の学び)。

加えて、二年生からは、別冊の「学びを広げる」の「1 言葉の図鑑」「2 いつでもどこでも」「3 言葉の海へ」「4 漢字探検」などが、漢字と結びついた語句・語彙の学びを推進する。提案の第4の方法は、ここによく生きる。そのことを、引き続き「開」の学習事例で確かめてみる。「開」は、第三学年の「新しい漢字を学ぼう②」に出てくる。

部首の学習のところ、学びのネットワークは、「もんがまえ」のかたちの類同で、「聞」(みみ、二年)、「問」(くち、三年)の取り扱いに及んだ。これは、次のように連鎖する。

「2 いつでもどこでも」には、「一対一で話すときには」と「さいころでスピーチしよう」(ともに三年)が設けられている。

前者の対話には「聞いているときには、相づちを打ちながら聞きましょう。」「わからぬ言葉や内容があったら、聞き返しましょう。」「という留意点の記述がある。「聞」の文脈であり、「聞き返す」は、「問」の類義性を検討することができる。

「3 言葉の海へ」には、「動きを表す言葉」「暮らしにかかわる言葉」「ちがう字で同じ読み」(いずれも三年)などが設けられている。

「動きを表す言葉」の一つのグループは「耳をすます」「耳をかたむける」「耳にする」である。これは、「聞く」ことと連動し、「語る」「話す」「説明する」のグループ、「さけぶ」「つぶやく」「ささやく」のグループと照応したり、対応したりする。

「暮らしにかかわる言葉」では、「開く」ことと川、海、山等との結びつき、港、空港等との結びつき、学校、図書館、公園、郵便局等との結びつきを考慮することができる。これらについては、総合的な学習指導の事例で取り上げたとおりである。

付随して、「未開」「開拓」「新開地」「開通」「開業」「開設」「再開などにつながり、精神的な側面に発展して、「開眼」「心を開く」「情報の開示」「公開」「局面の打開」「開運」などにもつながる可能性がある。

「ちがう字で同じ読み」の最初は「あける」で、「空ける」「明ける」「開ける」の区別の問題である。漢字の同音異字、同訓異字については、学習課題として欠かすことはできない。その点検には、「4 漢字探検」の中にある「漢字活用辞典」による検索が有効である。

ところで、「あける」の学習課題として、「蛍の光」の「いつしか年も、すぎのときを、あけてぞけさは、わかれゆく。」という掛詞を考えさせるのもおもしろい。

五 学校をあげての取り組み

学びのネットワークづくりは、漢字ドリル帳の自習方式では難しい。「漢字学習指導の基本」をふまえ、教科書を活用した週一、二時間¹の自在で豊かな学習指導（授業）によって創られる。

本稿「一 漢字学習指導の基本」では、「小学校六年間の見通しと振り返り」を指摘している。

低学年は、書写の学習指導との連携を図りつつ、教科書の教材化にそって学習を進めるのがよいだろう。前にも述べたように、低学年の配当漢字は、日常生活における基本概念や基本的な価値を示すものが比較的多い。『小学生の国語』では、これらをいくつかの仲間²に類別し、グループ化した日常生活との関連教材としている。このことは、本稿の「開」の事例（第三学年）で示した第4の方法に先行するものとして位置づけることができる。

中学年以降は、「開」の事例で示したように、教科書を活用しつつ、学校ごとに指導者の創意工夫によって、新たな組織化を図る。

さらに高学年では、学習の自立を目指す。高学年で学習を自立させるには、漢字学習について、形・音・義を部首で学ぶことを原則とすること、語句・語彙の学習指導との連携

を図ることに徹する。

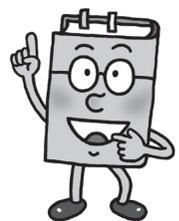
そのためにも、例えば部首の「あお・あおへん」の漢字は、学年別漢字配当表では、第一学年に「青」、第四学年に「静」がある、というような検索が可能となる部首別資料を作っておきたい。

また、学習者である子どもたちが自ら調べることのできる漢字辞典、国語辞典、ことわざ辞典等、辞典類もじゅうぶんに整備したい。辞典を読むことは、説明文の読み書きのすぐれた基礎学習にもなる。

おわりに、漢字をキーとした学びのネットワークづくりを目指す第4の方法にぜひ期待したいのが、新しい漢字ノート、あるいは言葉ノートである。学習者各自の、言語活動の源泉としての個性的で探究心に満ちた漢字ノート・言葉ノートが集積され、独自の手作り辞典ができるようであれば素晴らしい。



一年間を見通した漢字指導



一 一年間に学習する漢字に興味をもつ

児童に「一年間でこれだけの漢字を習うよ」と告げると、反応は二種類であろう。「簡単、知っている」と意気込むか、「こんなにあんなの」と億劫に思うかである。

しかし、遊びを取り入れながら一年間に学習漢字を紹介すると、俄然、やる気を出してくる。ここでは、一年間を見通した漢字指導のアイデアを紹介する。

今回は四年生、五年生で学習する漢字を対象にして実践を行ったが、むしろ、どの学年でも実践可能である。『小学生の国語』の「新しい漢字を学ぼう」のページをすべて眺めることとする。二十字ずつ掲載されているページをくりながら、この一年間でどのような漢字を習うのかを見通していく。

① 画数に着目する

新学年になって、児童が期待もし、不安にもなるのが、学習がより多くなったり難しくなったりすることである。漢字についても同様である。今までより、字数が多いだろうか、

難しい漢字が増えるのではないだろうかと思う。そこで、五年生の導入として、画数に着目して不安感を取り除いてみた。

一番画数の少ない漢字を探そう

六画だろうか、五画だろうか、児童たちは一生懸命に探す。四画では「支」が見つかる。しかしすぐに「久」の三画を発見する児童がいる。思いのほか、「可、句、示、比、仏」など画数の少ない漢字が見つかり、児童たちは安堵の表情である。このように見つけた漢字で「ぼうで支える」「久しく会わない」など簡単な文を作ってイメージ作りをすることもできる。

次に、児童からは自然に「一番画数の多い漢字を探そう」という声が出てくる。十四画、十五画など次々に画数の多い漢字を探す。こうなってくると、もう画数に対して苦手意識や不安感はずいぶん薄らいでくる。

さらに、漢字の階段を作るのも、画数を意識するのに都合がよい。



とこのように画数で分けていく。

② 部首に着目する

五年生にもなると、さまざまな部首を知っている。同じ部首の漢字を集めることはよく行われる指導であるが、一年間に学習する漢字に対して行くと、児童の興味も新たになる。

「きへん」の漢字を集めよう

「桜、格、枝：」などたくさんさんの漢字が集まる。次に少しレベルを上げてみる。

貝という字が入っている漢字を探そう

こうなると、「へん」だけではなく、資で、漢字の形を全体で見なければいけない。やがて、「賀、財、則、損、貸、貿、測、資

……」などが集まる。「頷、額、預」を挙げる児童もいる。これらは「おおがい」といつて「大貝」がもとになるので、これも「貝」が入っていると説明する。黒板に、「貝の入っている字」を書いていくと、なんとなく「お金に関係する漢字が多い」ということに気づく。そこで、漢字の成り立ちなどの話をする事ができる。今までなんとなく書いてきた部首がそれぞれ意味のあるものとして納得することができる。

この辺りで児童に任せて、

一分間で同じ部首の漢字を集めよう

というゲームを行ってみる。

「きへん」「ごんべん」など比較的馴染みのある漢字から、「のぶん」「りっとう」など調べるのに手間取る問題も出される。友達に対して難しい問題を出そうと、一生懸命に部首を調べる姿も見られる。

このような活動で、たくさん部首を覚えていくことができる。

③ 読みに着目する

「音読みが同じ漢字」「訓読みが同じ漢字」なども探しやすい。漢字のテストなどでは、前後の文で判断せずに知っている「同じ発音」の漢字を当てはめてしまう児童が多い。同じ音や訓であっても、意味が異なることを

おさえておく必要がある。

例えば、「以、衣、位、囲、胃」は「イ」と読む。この中から、スリーヒントクイズで一つにしぼるという活動ができる。

「第一ヒント それは二つの部分に分かれます。」

「第二ヒント それはスポーツの場面などで使います。」

「第三ヒント 訓読みは『く』から始まりません。」

「位！」

という歓声上がる。このようにヒントを出していくと、漢字の構成や音訓などに着目して考えるようになる。

二 さまざまな辞書を活用して

ここまででは、教科書の漢字のページをもとにした学習やゲームを紹介した。慣れてきたら、辞書を利用すると漢字の学習にも幅が出てくる。

① 漢字辞典を使って

部首や画数、成り立ちなどを調べるには漢字辞典がいちばん調べやすい。特に、成り立ちは児童が最も興味をもつところである。

自分の名前に使われている漢字の成り立ちや意味を調べることもできる。自分の名前に使われている漢字の意味を知ること、その名前にこめられた願いをうかがうことができる。

② 国語辞典を使って

音読みや訓読みを手掛りに、国語辞典を引くと、熟語や反対語、同義語などに広がっていく。特に、訓読みで調べると、意味がよりわかりやすくなる。

③ ことわざ辞典を使って

ことわざ辞典の総索引などで、学習した漢字を調べていくと、おもしろいことわざや故事成語などを知ることができる。

「仏の顔も二度三度」
「仏頂面をする」

などのことわざから、「仏」のイメージをもつことができる。漢字が生活に結びついていることを実感できるだろう。

以上、漢字を題材に言葉を広げる活動を紹介した。児童の実態によってはもっと広がった活動ができると考えている。

部首が「こころ」の漢字を集めよう

二年「心」「思」／三年「急」「息」「悪」「悲」
「意」「感」「想」／四年「必」「念」

○他の熟語―「応用」「応えん」「一応」

※「反応」「順応」は「おう」と読まず「のう」と読む。「han ou」→「hannou」

○部首「こころ」と仲間の部首に「卜(りっしんべん)」がある。「性」は次頁に掲載。「卜」は心が立っているので「立心べん」という。

四 桜 さくし

部首が「きへん」の漢字を集めよう

○「桜」を分解すると「木」「ツ」「女」。

○木の名前として他に、「梅」「松」がある。

○他の熟語―「夜桜」(夜見る桜の花)、「葉桜」(花が散って葉が出た桜)

○同頁にある「条」の部首は下につく「き」。

五 質 シツ

部首が「かい」「かいへん」の漢字を集めよう

一年「貝」／二年「買」／三年「負」／

四年「貨」「貯」「費」「賞」／

五年「賀」(次頁に掲載。)

○質 ⇄ 量

○「質」は「シツ」の他に「シチ」とも読む(中学校配当音訓)。「例」質屋(シチヤ)

数と読み方が同じ漢字を集めよう

「一」―「市」

「二」―「荷」「似」「児」

「三」―「山」「産」「参」「算」

六 則 ソク

○則(きそく、きまり)↓「規則」「法則」

部首は何でしょう

○部首は、「かいへん」ではなく「りつとう」。

同じ「ソク」という読み方でも違う漢字は？

「則」+「イ」⇄側(そば、わき)

熟語は、「右側」「側面」。

「則」+「シ」⇄測(はかる、おしはかる)

熟語は、「測定」「予測」。

七 破 ハ・やぶ・る・やぶ・れる

○部首は「いしへん」

○「破る」は、「紙を破る」「約束を破る」ときなどに使う。また、「敵を負かす」という意味でも使う。しかし、「負ける」の意味では「敗れる」を使い、「破れる」は使わない。

八 績 セキ

漢字の一部を使って「セキ」と読む漢字は？

「績」↓「成績」「業績」「実績」「功績」

「積」↓「積雪」「山積」「面積」「体積」

「責」↓「責任」「責務」「責」は未習の漢字。

○同じ「いとへん」で「絶」が同頁に掲載。

※「絶対」「絶体絶命」

以上、「新しい漢字を学ぼう①」についていくつかの漢字を取り上げ、実践例を示した。注意することは、一つの漢字の意味や部首や熟語を形式的に教え込むのではない。大事なことは部首や既習の漢字の一部分に分解したり、既習の漢字や熟語を集めたり、他の漢字と比べてりする活動を入れながら、楽しく学んでいくことである。

三 「漢字ノート」ができた

子どもたちは次のような漢字を選んだ。

夢〓九名／笑〓三名／輝〓三名／楽〓三名
 ／友〓三名／絆〓二名／歩〓二名／以下各一名
 ずつ命・宝・善など〓三十名

「夢」「笑」「輝」「楽」といった明るさを感じる漢字や「友」「絆」といった人との関わりを表す漢字を選んでいる子どもが多い。また、自分の名前から選んだ子どもも多かった。

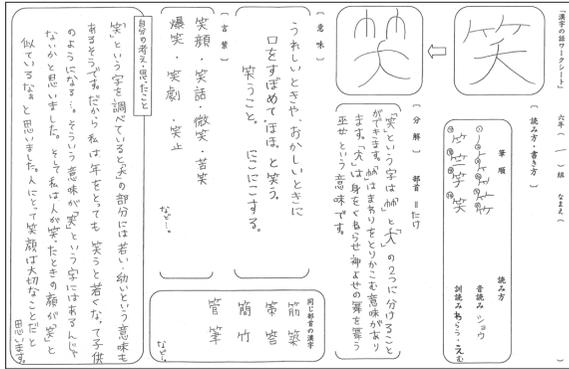


図2 児童の漢字ノート「笑」

漢和辞典で漢字の成り立ちを調べる際、例えば「笑」という漢字は「竹」と「夭」とに分解して、さらにたどりながら調べなければ、意

味の理解はしにくい。分解できる漢字は、部首やその他の部分もできるだけ分けて、次々に調べるように助言した。漢和辞典に慣れない子どももいる。総画索引や音訓索引など、調べ方を助言した。また、子どもの漢和辞典だけで調べきれない漢字もあるので、指導者側で準備した資料を個別に渡すようにもした。

実際の授業では、漢字について調べている途中で時間がきたが、どの子どもも漢字の形が意味に深く関わっているおもしろさを理解し、漢字ノートにメモしていく熱心な様子が見られた。字形・読み方・筆順・分解・成り立ち・意味・言葉・同じ部首の漢字という項目を漢字ノートの内容にしたことが、効果的であった。

漢字を調べて感じたことや考えたことを書く活動については、授業後の個別の指導になった。文章を例示する。

（漢字にあらためて興味をもったこと）
 歩という字は、止と少で構成されると思っていたのですが、足あとの形をしたものだと思って意外だったので、もっといろんな漢字のなりたちについて調べてみたいと思いました。たとえば、正という字は、足が目標の所を指してまっすくに進むことを表した字です。

（卒業を目前に控えて考えたこと）
 「絆」という字の「糸」はもともと細いきぬいとかからみあった字であって、友だちとの絆、親子の絆などは、人と人との関係がまるで糸がからみあっているみたいに、決して外れることのない深い関係を表しているのだと思います。

これからぼくは、友達との絆を大切に、大人になつていききたいと思います。

それぞれに発想を広げていることがわかる。さらにねらっていたのは、これまで学習した教材や他教科の内容にまで連想を働かせて書く文章である。そこに迫るために、学習への慣れや時間のゆとりが必要であると感じた。

四 『わたしたちの漢和辞典』の完成

完成した漢字ノートをプリントして「わたしたちの漢和辞典」と表紙をつけて綴じ、子どもたちに配布した。

部首索引を巻頭に掲載したところ、互いに、調べた漢字やその成り立ちを読み合つて声をかけている姿が見られた。

楽しい漢字の学び合いをどの子どもも体験できたことがわかる。



三省堂 例解国語辞典 第四版

田近洵一 編 | 1,995 円 (税込) / B6 判 / ISBN978-4-385-13821-3
[ワイド版] 2,205 円 (税込) / A5 判 / ISBN978-4-385-13822-0

- ▶ すべての漢字にふりがな付きで、1年生から使える。
- ▶ 新開発の用紙で、20%の軽量化を実現。
- ▶ 類書中最軽量で、最大級の33,000語を収録。
- ▶ 豊富な用例・図版や例解コラムに加え、特設コラムをさらに充実。
- ▶ 地名・人名も取り上げ、他教科の学習にも活用できる。
- ▶ 常用漢字をすべて収録、くわしく解説。付録に、イラストで楽しむ「くらしの中の英語」ポスター。
- ▶ 2色刷。文字が大きいワイド版も同時刊行。



三省堂 例解漢字辞典 第三版

林 四郎 (主幹), 大村はま 編

1,995 円 (税込) / B6 判 / ISBN978-4-385-13817-6
[ワイド版] 2,205 円 (税込) / A5 判 / ISBN978-4-385-13818-3

新装版

- ▶ 新開発の用紙で20%の軽量化を実現。
- ▶ 類書中最軽量で、最大の3,000字を収録。
- ▶ 最新人名用漢字983字にも対応。常用漢字は筆順を明示。
- ▶ 漢字の字義ごとに熟語を分類する画期的方式で漢字の意味の広がり把握。
- ▶ 豊富な[例][表現]欄、充実したコラム、多彩な付録。
- ▶ さくいんとしても使える「小学校で学ぶ漢字一覧表」ポスター・「漢字辞典引き方ガイド」シートの二大特別付録つき。
- ▶ 2色刷。文字が大きいワイド版も同時刊行。

三省堂 国語教育

ことばの学び

a new way of learning Japanese

平成23年度版『小学生の国語』『小学生の書写』
教科書特集号 別冊 vol.2

2010年6月20日発行

● 編集・発行人 八幡 統厚

● 発行所 株式会社 三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14

TEL 03 (3230) 9427 [編集] 9551 [営業]

URL <http://小学生の国語.jp/>